

Annual Report

2024



特定非営利活動法人 国際ボランティア学生協会
2024年度 年次報告書

代表挨拶

本協会も発足から今年で 33 年目を迎えました。これまで、国際協力・環境保護・地域活性化・災害救援・子どもの教育支援の 5 つの事業を中心に、本部主催とクラブ主催（現在各地域にある大学を中心とした 28 のクラブ）事業を、これまで 9,359 本行ってきました。この事業の参加者数は延べ 12 万人。実質約 3 万人の学生が事業に参加し、社会に巣立っていきました。

昨年の学生数は約 2,700 名（80 大学）。これらを運営する学生本部役員は、毎年、選挙で選出され、入れ替わっていくのが本協会の特徴です。基本は、社会課題解決に向けて「学生でも出来る、学生だから出来る」事業を行うことですが、これらを通じて、学生個々の人間的成長も大きな目的としてきました。そのため、社会環境や学生の変化に応じて、組織運営方法や研修内容を変更しています。

この 33 年の間、社会は大きく変化し、様々な出来事が起こりました。特に、近年はロシアのウクライナ侵攻や中東紛争、米中対立などによって、本協会も強く意識してきた SDGs の、2030 年の目標達成が難しくなっていることに危惧を抱いています。

また、2020 年、世界を震撼させた新型コロナウイルスによるパンデミックは、

日本において 4 月に緊急事態宣言が発せられ、最終的に 2023 年 5 月に新型コロナの「5 類感染症」への移行をもって、実質的な最終解除となりましたが、この間、3 年間という長きに渡り行動制限が行われました。

この間、本協会もほとんどの活動を停止し、何とかオンラインでの会議や研修等を行ってきました。学生にとっても、それぞれの学校生活（中・高・大学）で人との出会いや、人間関係の構築を習得する多くの機会を失ってしまいました。

本協会において、コロナ発生からの 5 年間をふり返ってみると、行動制限の影響で、学生たちは同級生との交流はあるものの、先輩、後輩を含めたチームで活動する機会を失いました。これはチームとして活動するために必要な「先輩を頼る、後輩を育てる」といった良い意味での上下関係が無くなったとも言えます。

最近の厚生労働省のデータによると、大卒の 3 年以内の離職率は約 32.3%。これは 3 人に 1 人が 3 年以内に離職しているということです。この状況は、悪いことだけではないのですが、同学年以外の人たちとチームで動く経験がないことで、社会人になった時、問題を一人で抱え込み、先輩・同期・後輩を頼り・助けてもらうことができないなどのコミュニケーションの未成熟さも要因の一つではないでしょうか。

本年、コロナが明けて3年目を迎え、本協会でもチームワークを育む研修や仕組みを作り、実施していますが、その効果があるのか、徐々に先輩・後輩の関係も回復傾向にあるようです。本協会は、「共に生きる」をビジョンに掲げる組織ですから、まずはここの強化に努めていきたいと考えています。

今、私たちを取り巻く社会や世界は、確実に混沌とした予測不可能な時代に入っているようです。日本国内においても、多くの課題を抱え、これらの課題をいつまでも先送りするわけにはいかないでしょう。まずは、社会の課題を知り、それぞれが出来ることをやる。それを実行し、訴求していくことが重要なのは間違いありません。

**特定非営利活動法人 国際ボランティア学生協会
代表理事 下村 誠**

本年も、若者が持つ才能や熱意を結集し、「熱意は人を動かし、社会を動かす」を掲げて、事業を展開して参りたいと思っています。

皆様の一層のご支援・ご協力を賜りますようお願い申し上げます。



Annual Report 2024

代表挨拶	2	災害救援	15
2024年度事業ハイライト	4	子どもの教育支援	16
事業報告		その他の事業	17
国際協力	6	卒業生紹介	18
環境保護	7	協賛企業一覧.....	20
日経パネルシステムインタビュー	8	メディア掲載一覧	21
環境保護	10	収支報告	22
地域活性化	12	団体概要(32期学生組織)	23

今回はすべての事業を掲載するのではなく、特徴的な事業を中心に紹介していきます。

能登半島地震に対する復旧・復興支援をはじめ、豪雨災害にも対応しました

国内で発生した豪雨災害、地震（1府6県）に対して、27回、延べ939人を派遣し、若者のマンパワーと元気を被災地に届けることができました。また、トルコ・シリア地震、能登半島地震に対する募金活動を実施し、延べ755人が従事しました。

2024年1月1日に発生した能登半島地震に対しては、昨年6月頃までは避難所での炊き出しを継続し、その中で地域住民と学生が被災者と救援者ではなく、一人の住民と学生として接することができ、中には本当の祖父母と孫のように接している姿も多く見られました。

また、地元高校の吹奏楽部の演奏会に出演させていただいたり、伝統的なお祭りや復興を願ったお祭りにも参加させていただいたりもしました。

そのような中、9月末に豪雨災害が発生し、IVUSAのメンバーも一時孤立することになりましたが、豪雨後は、再び毎週末活動を実施し、特にアクセスが難しい外浦地域を中心に災害廃棄物の搬出や土砂出しなどを行いました。



自分たちができる ゼロウェイストに向けた取り組みを実践

ごみをできるだけ拾わなくても良い社会を実現するために、「ごみをできるだけ生み出さないために自分たちに何ができるのか？」を考え、実践していきました。具体的には、使い捨てカイロをリサイクルしている会社にする、マイボトルを持ち歩く、環境負荷の少ないお弁当箱を使用するなど、負担が少なくてもできることを少しずつ実践することです。

また、ゼロウェイストの理念を発信していくための啓発も兼ねて、東京の山手線と大阪の環状線を一周して清掃するイベント（学生393名が参加）を実施しました。

清掃活動でごみを拾うことの大変さを知ることと同時に、日常生活の中でごみをできるだけ出さないようにするためにはどうすれば良いのかを考え、実践していくことをこれからも継続していきたいと考えています。



韓国の学生と一緒に 海洋ごみ問題に対して取り組みました

韓国との国境の島・対馬は、日本で最も多くのごみが海外から流れ着く場所でもあります。2024年度は、釜山外国語大学校や釜山文化財団と連携し、多くの韓国の学生や社会人と一緒に対馬で清掃活動を実施しました。海洋ごみという共通の課題に向けて、両国の若い世代が一緒に活動し、友好を深める国際協力的な要素を持った活動として発展させていきます。

さらに2024年はプラスチック汚染に対する国際的なルール（条約）作りに向けた国際交渉が大詰めを迎えており、11月末に釜山で行われた会議で合わせて、「日韓プラスチック若者会議」を開催。提言を行うとともに、韓国のNGOと情報・意見交換をしました。



自分たちで資金を集め、 カンボジアの農村に学校を建設する

2008年からこれまで小学校9校、図書館1棟を建設してきました。1991年まで続いた内戦であらゆる教育基盤が破壊されたカンボジアも近年は目覚ましい経済発展を遂げ、子どもの識字率・小学校就学率はほぼ100%にまでなりました。

しかしその一方で、農村地帯ではまだ教室が足りずに教育が行き届かず、「卒業できない」「中学校への進学ができない」などの課題もあり、教育格差が問題になっています。

2024年度は2025年2月16日から23日の8日間、学生18名、卒業生1名、職員1名で、首都プノンペンから6時間ほど移動したベトナムとの国境近くのカンボジア王国クラチェ州にあるキロ62小学校にて、昨年2024年の基礎工事に続き、

教室内のモルタル左官作業を行いました。

資金が足りずペンキ塗りや廊下、校舎の外壁の完成までは至れませんでした。雨風によって授業も行えない状態だった旧校舎に代わって、新しい校舎の教室を使用できる状態にすることができました。活動中は村民のお宅にホームステイし、子どもたちとの交流の企画も行われ、一方的な支援ではなく同じ目線に立ち活動することで、絆も生まれ翌年につながる活動になりました。

また、この活動のために街頭募金やイベント出店などを通して自分たちで資金調達を行っています。



参加した学生の声

立命館大学2年 國分 柚希

現地で見せてくれた子どもたちの笑顔は、貧困や教育格差から想像していた姿とは全く違っていました。一緒に過ごす中で、「学びたい」「学校が好き」という気持ちが伝わってきて、その思いを大切に、これからの彼らがもつ夢につなげていきたいと思いました。

私自身もカンボジアに行き、まだまだ知らない世界があることを実感しました。だからこそ、これからは学生という同じ目線で、学校建設という形で子どもたちの学びを支えていきたいです。

地元企業と連携して琵琶湖を清掃

琵琶湖は、「近畿の水瓶」と呼ばれており、滋賀県を含め、瀬田川・淀川を通じて京都府、大阪府、兵庫県に住む1,450万人が利用する貴重な水源となっています。

しかし、琵琶湖に流れ込む河川を通じて散在性のごみが流れ着き、美しい景観を損なうとともに、瀬田川・宇治川・淀川を通じて、大阪湾にごみが流出していると言われています。琵琶湖のごみを減らすことは海に流出のごみの量を減らすことに繋がるため、2021年から、年に2回大規模な清掃活動を継続

して実施しています。この活動は学生だけではなく、地元の企業の方にもご参加いただいています。

また、読売テレビ放送株式会社が主催する「鳥人間コンテスト」では、社で募集されたボランティアスタッフや社員の方々と共に行う湖岸清掃に参加させていただくことや、イベントで出るごみの量を減らすための工夫についてのご提案させていただいています。



参加した学生の声

龍谷大学4年 山元 天君

200人もの学生が琵琶湖一周清掃に挑む中で、私は主に裏方を支える責任者として、全体の進行と現場への指示を担いました。多くの仲間と協力し、一体感を持って課題に向き合えたことが印象に残っています。

ごみを拾うだけでなく、ゼロウェイスト(そもそもごみを出さない)の理念を地域に伝え、行動を変えていくことの大切さを再認識しました。これからもこの経験を活かし、美しい琵琶湖を守る活動を広げていきたいと思っています。

パートナーの企業の方にインタビューさせていただきました。

IVUSAが行っている琵琶湖清掃に参加していただくとともに、様々な形でご支援をいただいている日軽パネルシステム株式会社滋賀工場の飛奈光さん(事務課長)、渡辺寛幸さん(CSR統括室副室長)、福岡賢一郎さん(事務課/SDGsチームリーダー)にお話を伺いました。



日軽パネルシステム株式会社

断熱パネルを使った、
空間創造企業です。

<https://www.nikkeipanel.co.jp/>



Q.IVUSAの活動に参加されるようになった経緯を教えてください。

2023年の8月に行われた琵琶湖の清掃に参加したのが初めてだったのですが、そのきっかけは一週間くらい前に工場に「琵琶湖の清掃をするので一緒にやりませんか」とお誘いの電話があったことです。

その当時はIVUSAの名前も知らなかったので戸惑いましたが、学生の皆さんが近隣の企業を巻き込んで琵琶湖の清掃をしているということが伝わりました。その当時は、社会貢献活動を模索していた時期だったので、いい機会と思い参加させていただきました。ただ時間がなかったので参加した社員は5名でした。

Q.他にはどのような社会貢献活動をされていますか？

メイン工場のある滋賀県長浜市を中心に地域に根ざした活動を行っています。例えば、7月1日の滋賀県「びわ湖の日」には清掃活動を実施するほか、長浜曳山祭では寄付金等を通じて地域文化の発展と継承に貢献しております。近年では長浜青年会議所が主催する湖北地域の小学生を対象とした「創造体験フェス」に協賛、運営協力もしております。2025年は滋賀県で44年ぶりの国民体育大会「わたSHIGA輝く国スポ・障スポ」が開催されることとなり、当社はオフィシャルスポンサーとして協賛させていただいています。

また、第二の製造拠点がある山口県下関市では、市が主催する「インクルーシブスポーツフェスタ in しもの





事務課長 飛奈 光さん



事務課 / SDGsチームリーダー
福岡 賢一郎さん



CSR統括室副室長 渡辺 寛幸さん

せき2024」の企画・運営に、日本車いすラグビー連盟のオフィシャルパートナーである日本軽金属グループとして協力しました。年齢や性別、国籍、障がいの有無など多様な個性を認め合い、「スポーツで全てを包み込む社会」を実現するために、全ての人々を参加対象としたイベントです。

Q.参加者はどのように集めておられますか？

管理職を巻き込むようにしています。その理由は、管理職が率先して活動に参加してその意義を理解してもらうことで、他の従業員を巻き込んでくれると思うからです。

Q.管理職の方が率先して参加されているというのは素晴らしいですね！実際に参加された方の感想を教えてください

清掃活動に参加した従業員から「楽しかった」という声を聞きました。ある参加者からは工場からバスで移動するときは、学生の時の遠足気分でした（笑）と話していました。

「ごみを拾う」というシンプルな目標を掲げて、みんなで体を動かすのは楽しいです。開会の挨拶が終わるとすぐに清掃を始める人もいました。早くやりたくてたまらなかったのでしょうか。

また、当社はほかの団体と協働する機会が少ないので、IVUSAメンバーの熱意や志に触れることは大変刺激になります。ただ、清掃活動をしているとそれに集中し

てしまい、コミュニケーションが少なくなってしまうのは改善点ですね。

当社としてはできる限り多くの従業員に活動に参加してもらいたいと考えております。

Q.従業員の方が参加されるようになって職場で何か変わったことはありますか？

工場内で実施する献血の申込者数が10年前に比べて約2倍に増えています。少しずつではありますが、社会貢献に関心を持つ従業員が増えてきたのではないかと感じています。また、会社としても社会貢献活動をもっとやっていこうという機運が高まりつつあります。

Q.今後のビジョンを教えてください

まずは従業員が参加できる機会を提供し、活動を知ってもらうことが大切だと考えています。IVUSAを始め、県・市・NPOといった団体と連携・協働し、多くの人が共感できる、地に足の着いた活動を継続することが重要です。

当社は、「人々の豊かな暮らしといきいきとした地球のために」というビジョンを掲げています。日軽パネルシステムらしい社会貢献はどうあるべきかを常に問い続けながら、その実現に向けて真摯に取り組んでいきたいと考えています。



学生のマンパワーを活かした侵略的外来水草の除去

IVUSAでは、日本の重要な水源である滋賀県の琵琶湖と千葉県印旛沼で、侵略的外来水草の除去活動を行っています。

琵琶湖では、2009年に発見されて以来、急速に拡大したオオバナミズキンバイが漁業や生態系に悪影響を与えています。2013年からこの重労働な除去作業に携わり、「学生の力で琵琶湖を守りたい」という思いで活動を行っています。行政や地元漁師、NPOなど多様な連携のもと、これまでに100回以上の活動で約4万㎡、600トン除去しました。しかし、近年

再び拡大傾向にあるため、完全除去を目指し活動を強化しています。

また、印旛沼では、ナガエツルノゲイトウが工業用水や飲料水の供給、内水面漁業に支障をきたしたり、取水口を塞ぐことで排水ができなくなったりして、洪水リスクも高めています。水中での切り離しから運搬まで、多様な作業を通じてこの駆除に取り組んでいます。

琵琶湖と印旛沼の豊かな自然を守るため、私たちはこれからも尽力していきます。



参加した学生の声

日本大学3年 土屋 諭史

水中作業は慣れない感覚の中での作業ということもあり、なかなかスムーズに作業を進められませんでした。

しかし時間が経つにつれ、コツを掴めた際には、水中班全員で協力しながら作業を早く進めることができました。特に、一番体力を使ったのが引き上げと運搬です。水草の塊といえば軽そうに思えますが、実際は多量の水も含んでいるため、とても重く、数人で運ぶのはとても苦労しました。

総じて、ナガエ駆除の大変さを認識、そしてこのような作業を継続して行っている方々を改めて尊敬する機会となりました。



立命館大学2年 北村 大和

この活動は地元の漁師さんや滋賀県庁の方々の支えがあって成り立っています。地元の漁師さんは除去活動のため船を出してくれたり、県庁の方々は活動に欠かせないライフジャケットを貸してくれたりしています。多くの方が支えてくれている活動を琵琶湖、鴨川など水辺の環境を守るため、協力していただいている方々の期待に応えるためにもこれからも継続的にこの活動が続けていきたいです。

放置竹林を資源に変える

長野県飯田市をはじめとする伊那谷地域にて、竹林整備を中心に環境保全活動に取り組んでいます。

この活動はIVUSAのOBが伊那谷地域にUターンをし、「大学生世代が少ないこの地域に、IVUSAに来てもらい地域のために一緒に活動したい」という想いから始まりました。

彼が、様々なNPOの活動に参加する中で、竹林整備等に取り組む天竜川鷺流峡復活プロジェクト(現:NPO法人いなだに竹Links)に出会い、現在はいなだに竹Linksの理事を務め、IVUSAのカウンターパートとして活動の受入を担ってくれています。

この活動は、水資源や里山資源を守り豊かにしていくことと同時に、それらを持続可能な取り組みにするために、若い世代の担い手確保のため、地元の高校生や住民・企業、さらに東海圏の大学生(伊那谷地域の高校生は、東海圏に進学する人が多い)等を巻き込んだ活動を展開しています。

活動では、竹の伐採を通じた竹林整備だけでなく、いなちく(竹Linksが販売している国産メンマ)の原料となる幼竹の収穫や一次加工、ワークショップなどにも取り組んでいます。



参加した学生の声

東洋大学4年 吉田 彩花

課題である放置竹林の解決に取り組む中で、問題は「悪」ではなく、見方を変えることで貴重な資源となることを実感しました。実際に収穫した幼竹を使ったメンマの商品販売に携わり、地域資源の活用を形にできたことは大きな学びとなりました。

また、参加した高校生が地元課題に関心を持つきっかけをつくれたことにもやりがいを感じています。世代を超えた関わりを通じ、課題解決が人と人をつなぐ架け橋になると信じています。

大蛇を担いで20年、IVUSAの地域活性化事業の原点

新潟県北東部に位置する関川村。人口約5,100人と小さな村ですが、平成の大合併には参加せず「小さくてもキラリと光る村」を目指して、村民と行政で力を合わせて村づくりを進めています。IVUSAでは2004年から関川村出身の学生の「自分の故郷を盛り上げたい」という思いから活動を始めました。関川村では、1967年に発生した「羽越水害」の慰霊と、昔から語り継がれている「大蛇伝説」を忘れないようにと、毎年「えちごせきかわ大したもん蛇まつり」を開催しています。

ギネスブックにも載っているこの大蛇を担ぎ、村を練り歩く大蛇パレードをメインに、花火大会や盆踊り大会を行って

ます。その運営サポートの他、地域の様々なお困りごとを学生がサポート、対応する「孫の手ボランティア」を地元社協と連携して行っており、庭の草むしりの依頼を頂いたり、集落の寄りに参加させて頂いたりしています。

よそ者である学生がギネスにも認定されている大したもん蛇まつりを盛り上げつつ、地域の方々との交流やそれを通じた郷土愛の育みによる持続可能な村づくりへの貢献を目指しています。

また、去年はIVUSAと関川村との交流20周年を迎えたことから記念植樹として村の木の「もみじ」を植えました。



参加した学生の声 國學院大學3年 笹川 綸那子

約4キロの道のりを、声を掛け合いながら担ぐので、大きな一体感が生まれました！

また、大蛇の担ぎ手以外にも子どもたちとの川遊びや花畑での石拾いなど様々なボランティアにも関わることができました。活動全体を通して、村民の方々の温かさや楽しさを実感し、とても充実した4日間でした！

世界の里海の頂点*と呼ばれる日生の環境を守る

瀬戸内海国立公園に指定されている日生諸島は岡山県南東部の備前市にあり、大小13の島々で構成されています。日生諸島の中心にある日生地区は元々、「日生千軒漁師町」と呼ばれ、古くから漁業が盛んな地域で、特に牡蠣は日生を代表する特産品です。

しかし、高度経済成長期に、工業化に伴う海洋汚染の影響で漁獲量が減少しました。それに対して、日生漁業組合の方や専門家、そして地元漁師などによるアマモという海草の再生活動をはじめとする長年の努力により海洋環境は改善され、再び漁業ができる状態に戻りました。このように人の手が加わることで生物生産性や多様性が高くなった沿岸海域の

ことを「里海」と言います。日生地域では里海保全活動を先駆的に行っており、全国的に注目を集めています。

ただ、海洋ごみや少子高齢化による漁業の担い手不足など、次世代に向けて様々な課題を抱えています。私たちはこれらの課題に対し、海岸清掃やアマモの保全活動、漁業作業の支援を通じて、里海の保全と日生諸島の未来を守ることを目指しています。

また、近年、若い世代を対象にした「渚の交番ひなせうみラボ」で里海保全のワークショップを開催するなど、ひなせうみラボとの連携も強めており、海について共に学び、次世代に引き継ぐための活動もしています。



参加した学生の声

立命館大学4年 清水 款士

日生での里海保全活動は、全国に先駆けて行われているので、その活動に携わせていただけることに誇りを感じております。また、ワークショップを通じて、多くの子どもたちと共に、今日の海洋問題について考え、行動のきっかけを作る時間は、非常に有意義だと実感しています。

耕作放棄地で作物を作り、コロッケにして販売

西伊豆町は伊豆半島西岸に位置し海や山に囲まれ、夕方には綺麗な夕陽が見える町です。

その一方で急激な少子高齢化・過疎化によって、50%以上が高齢者と県内トップの高齢化率で産業の担い手不足や文化の消滅といった課題に直面しています。

IVUSAでは2014年春の町の観光資源である黄金崎の松を守る活動から地域活性化の事業を開始し、2016年には地域連携協定を締結しました。

近年では主に町の耕作放棄地を再生し活用する事業に取り組み、昨年度は11回、286名の学生が参加しました。町内から出た間伐材、製材所や家屋解体で出た端材を炭化しパイオ

炭として土壌改良に使用し、作物を育て、育てた作物を地域の産地直売所で販売したり、ホテルや飲食店に卸したりと、資源の地域内循環の取り組みを行っています。

販売するだけでなく収穫の際には現地の小学生も授業の一環として体験参加し、給食に活用いただいたりもしています。

また活動の中で、地域の夏祭りや町のお祭りの運営補助を行いながらIVUSA自身も出店し、自分たちの育てた野菜と町内産品の鹿肉をコラボして商品開発した「西伊豆コロッケ」を販売したり、子ども向けのブースを出したりして、担い手の少なくなった地域のお祭りを盛り上げています。



参加した学生の声

国土舘大学3年 長谷川 頌

畑で炭や鶏糞を撒いたり、収穫物を実際に産地直売所で販売したりしているのを見て、この地域循環のサイクルが地域活性化につながることを、自ら経験し身を持って知ることができました。それと同時に頑張って育てた作物が獣害にあったという、ニュースでしか知らなかったショックの大きさも自分事として知ることができました。

そして、IVUSAが町で実施しているフェスでは、学生が開発したコロッケを販売したり、地域の方々と協力してイベントを一から作ったりしていることに驚き、地域の方々の支えにも感動しました。

IVUSAのクラブがある地域で起きた水害に対応

2024年7月25日午前から7月26日未明にかけて、活発化した梅雨前線の活動により線状降水帯が発生し山形県から秋田県にかけて大雨となり、山形県は6市7町3村、秋田県は6市2町2村に災害救助法の適用がなされました。

山形県酒田市には東北公益文科大学の学生を中心に組織するクラブがあり、平時から酒田市、遊佐町での海岸清掃を行っていることからIVUSAでは酒田市、遊佐へ災害ボランティアを派遣しました。

8月3日から9月23日の期間で7回の活動を行い、延べ115人が参加しました。酒田市では災害ボランティアセンター

が設立されるのが初めてであり、IVUSAではセンターの運営補助、資機材管理をはじめ、ニーズ調査、災害ボランティアセンターから派遣されるボランティアが立ち入ることが出来ないエリアの土砂出し、家財出しを行いました。

学生のパワーだけではなく、DRT-YAMAGATAやOPEN JAPAN等のNPOと連携し斜面崩壊、土石流により家屋の一階屋根まで堆積した土砂の除去や、泥が堆積していた集会所では泥の除去後、新たに床を敷いたり、地域住民が集えるようにベンチを作成したりと再建に向けた活動もしました。



参加した学生の声

立命館大学3年 福井 実梨

災害救援活動の中で強調されている、「元気を置いてくる」ということを実感して、IVUSAだからこそできることがあると感じました。

一階の天井まで土砂が堆積しているような場所で、私たち学生が決して楽ではない作業を泥まみれでも楽しそうに作業している姿を見て、住民の方の表情が徐々に和らいでいき、「もう少し頑張ってみようかな」と言ってくださる方もおられました。目の前の泥を掻くためではなく、その先にある住民の方の笑顔のために、IVUSAは災害救援をしているんだと改めて実感できました。

困難な環境に置かれた子どもたちを「お兄さん・お姉さん」としてサポート

IVUSAでは、新潟県長岡市の双葉寮、新潟県見附市の愛児園という2つの児童養護施設の子どもたちをサポートしています。

児童養護施設の子どもたちは、虐待や親との死別を経験するなど、複雑な家庭環境で育ってきたことから、自己肯定感が低い、コミュニケーションが苦手、といった課題を抱えています。

また、学習どころではない家庭環境であったために、学習面に課題を抱えている子どもが多くいます。そのため、IVUSAでは、オンライン学習支援と対面活動の2種類の活動を通じて、子どもたちに対する支援活動を行っています。

オンライン学習支援では、週1回、Zoomを繋ぎながら、小学生から高校生の子どもたちと一緒に勉強をします。学生と一緒に勉強することで、子どもたちが学習に対して前向きに取り組

めるようになることを目指して活動しています。また、同じ学生が継続して関わることで、子どもとの信頼関係を築くことを大切にしています。

対面活動では、春休みや夏休みといった長期休暇中に、2泊3日で学生が施設を訪れ、子どもたちと過ごします。普段、学習支援でしか関わることができない子どもたちと一日を共にすることで、学生が子どもたちの日常を知ると同時に、対面活動を通して子どもたちとの関係性を深めることができます。

児童養護施設以外にも、生活困窮者世帯の子どもたち向けに、学習支援事業を京都府京田辺市、大阪府泉大津市にて自治体からの委託を受けて実施しています。

このように、年齢が近い「お兄さん・お姉さん」であるという強みを生かし、子どもたちの未来が明るいものとなるように、日々、活動しています。



参加した学生の声 立命館大学3年 沼田 あづ美

約2年前、私がこの活動に関わり始めたのは、「児童養護施設の子どもたちの力になりたい」との思いからでした。複雑な家庭環境をバックグラウンドに持ち、沢山の生きづらさを抱えていて、施設を出ると、自分の力で生きていく必要がある子どもたち。そんな子どもたちが、私たちとの関わりを通じてコミュニケーション能力や学力を身につけること、明るい未来を思い描けることを目指すと同時に、学習支援の場が子どもたちにとって安心感を持って過ごせる場所であり続けることができるように、これからも活動を続けていきます。

遺骨収集を通して亡くなられた方に想いを馳せ、平和について考える

戦後80年が経過した現在でも、国内外112万柱に及ぶ戦没者の遺骨が未収骨となっており、2016年に戦没者の遺骨収集の推進に関する法律が制定されて以後、政府も力を入れて取り組んできました。無念の末に見知らぬ地で果てた戦没者を、故郷やご遺族の元に還すべく事業を行っており、慰霊は勿論、平和や安全保障について考える場を提供しています。

2024年度は、9月9日から9月17日と2月17日から2月25日の2回実施し、計98名が参加しました。遺骨収集作業前にはアブリラガマ見学・平和祈念公園平和祈念資料館見学・ひめゆり平和祈念資料館見学・嘉数高台公園から普天間基地遠望・沖縄国際大学米軍ヘリ墜落現場視察・対馬丸記念館見学・ヌマチガマ見学と、戦争資料館や米軍基地問題の

痕跡を巡りました。

遺骨収集作業では、糸満市米須と摩文仁で調査発掘作業を行いました。普通は立ち入らない崖下のジャングルの中、昔の観光客等が捨てたと見られるごみの下を掘り起こしたりしながら、戦没者と思われる御遺骨6柱(6体)をお迎えした他、水筒等遺留品も発見しました。

活動最後には国立戦没者墓苑にて慰霊式典を行い、御英霊に追悼の辞を延べると共に、献花・拝礼を行いました。

戦後80年経過し、戦争を経験した人たちが鬼籍に入られる中、戦争の記憶を絶えさせないよう今後も若者がこの活動に取り組んでいきます。



参加した学生の声

名桜大学3年 石橋 嶺

一面に広がるごみの層。ナパーム弾の焼痕。ごみの中からお迎えされるご遺骨、遺留品、銃弾や手榴弾。これらは全て小学校の教室くらいのスペースの現場であったことです。この筆舌に尽くし難い今の現場の様子は、当時はより一層、想像を絶するものだったに違いないと思います。

私たちは一刻も早く、そうした中から戦没者をお迎えし、戦争経験者やご遺族に代わり、こうした事実を後世に語り継いでいきます。

卒業生に聞く

IVUSAの経験は どのように役に立ったのか？

NTT・TCリース株式会社

総務人事部 総務人事部門 人事担当課長

15期 法政大学卒 眞淨 睦

IVUSAは32年の歴史の中で、これまで合計3万人以上が卒業していきました。

社会で活躍する卒業生とのネットワークがIVUSAの最大の財産です。2025年度には卒業生会も発足する予定ですが、その準備委員を担っている卒業生2名にお話を伺いました。



● 学生時代はどんな活動に参加していましたか？

私がIVUSAと出会ったのは大学に入学した2004年の春でした。なんとなく参加した新歓イベントで面倒見のいい大学「5」年生の先輩に誘われて入会し、すぐにどっぷりとはまってしまいました。学部卒業後もIVUSAでの活動を継続するため、夜間の大学院に進学するほどに…。

院生時代も含めトータルで7年の間にインドでの住宅建設活動、ネパールでの小学校建設活動、中国での緑化活動や新潟県中越地震・東日本大震災をはじめとする全国各地での災害救援活動、九十九里浜、多摩川での清掃活動など、さまざまな活動に携わらせていただきました。

時には失敗し、悔しさや挫折感に打ちのめされることもありましたが、仲間とともにゴールを目指してプロジェクトをつくりあげた経験は、そのどれもが、何かを消費するだけの学生生活では味わえなかったであろう充実感に満ち溢れていました。

今ふり返ると、IVUSAで過ごしたこの時間は、社会に守られて生きてきたそれまでの自分から、社会にコミットしていく自分へと意識が変わっていったターニングポイントであったように思います。

● 今、どんなお仕事をされていますか？

卒業後、私は新卒採用の枠で現在勤めている会社に就職しました。営業先のちょっと困ったお客さんへの対応や仕事を円滑に進めるための上司との付き合い方などには、IVUSAでの「社会人経験」が大いに役立ちました。おかげで、クビにならない程度には存在価値を発揮できているのではないかと思います(笑)

数年は営業セクションにいましたが、10年ほど前に現在所属している総務人事部に異動し、社員の評価や昇格、異動配置の検討を行う業務を担っています。人事の仕事をしていて実感するのは、どんな社員にも「活かし方」があるということです。まわりからの評価がバツとしない人でも、業務やチームメンバー次第で活き活きとすることもありますし、逆に、エースと言われた人が環境によっては嫌んで見えることもあります。

● IVUSAの経験がどのように生きていますか？

会社という組織が持続的な成長を遂げるための最も重要なリソースは「人」であり、「人を活かし組織を活かす」ことが私のミッションだと捉えています。それはIVUSAでの組織マネジメントやプロジェクト運営において私が学んできたことだなあとしみじみ思う日々です。

● 今後のIVUSAへの期待

IVUSAがこれからも人の気持ちを想い、愚直に、熱く、遊び心も忘れずに、社会に挑戦し続けていくことを期待しつつ、私も負けないように精進していきたいと思っています。





京扇子店「大西常商店」の四代目女将

19期 立命館大学卒 **大西 里枝**

●学生時代はどんな活動に参加していましたか？

天草清掃活動や日韓学生ハンセン氏病患者自立支援活動などに参加していました。

皆さんに胸を張って伝えるような隊員ではなかったように思いますが、当時IVUSAに所属されていた先輩や同期の皆さんに憧れて、日々の活動をしていたような気がします。当時のIVUSAは本当に個性的な人たちばかりで、京都の箱入り娘として育った私にとっては、大変刺激的でした。

●今、どんなお仕事をされていますか？

新卒で入社したNTT西日本を退職し、自らの家業である「京扇子大西常商店」という会社で代表取締役をしております。創業113年目とはいえ、京都ではまだまだベンチャーに毛が生えた程度ですが、「扇子の美しさと伝統美を次の百年へ」という社是を掲げて活動しています。

個人的な仕事としては、「京都の文化を伝える」をテーマに活動しており、京都府の広報番組のコメンテーター、京都新聞でコラム執筆などを行っています。

ここだけの話ですが、グーグルで「いけず」で画像検索していたと、最初に私の顔が出てきます。ぜひご検索ください。

●IVUSAの経験がどのように活きていますか？

挑戦するのが大事で、失敗しても別にええやん、というのが一番の学びだったような気がします。IVUSAでは挑戦できるチャンスが多いと思います。まずは手を挙げるのが大切だよ、と教えていただきました。失敗しても大体のことはちょっと恥ずかしいな、くらいのもんです。社会に出て、まず「手を挙げる」ということがいかに大切かを実感しました。チャンスは挑戦した人にしかやってきません。普段からこういうことをしたい、と声をあげ続けていれば、どこかで見てくれている人がいるということを教えてもらいました。

と、まともなことを書きましたが、本当は下村代表にかけていただいた言葉が一番印象に残っています。私のことを扇子屋の娘だと知ってくださいっていて、当時から「おっ！扇子！元気か？」と何度もお声がけくださいました。当時は自分の家業にいいイメージを持っていませんでしたが、そうして声をかけていただく時だけは大変誇らしく思っていました。家業に戻るという選択肢のスタートはもしかして、下村代表の言葉だったのかもしれない。

●今後のIVUSAへの期待

ともに時間を過ごした仲間たちが、今それぞれのフィールドで活躍している姿を拝見しています。どこかで卒業生たちが現役世代に自分たちの経験や人脈を還元できるような機会があればと思っています。



IVUSA は学生が主体で運営していますが、行政や企業の方々をはじめとする様々な方々の支えがあって活動が成り立っています。

IVUSA ではこのようなご支援いただいている方々を「コントリビューションパートナーズ」と呼ばせていただいております。

法人会員

- ・三菱マテリアル株式会社
- ・株式会社サンライフ
- ・日軽パネルシステム株式会社
- ・株式会社三四郎
- ・一般社団法人 日本イベント協会
- ・特定非営利活動法人JYMA
日本青年遺骨収集団

寄付・支援金

- ・アスカ美装株式会社
- ・特定非営利活動法人
ネットワーク・フェニックス
- ・シーズ
- ・読売テレビ放送株式会社
- ・ナガセプラスチック株式会社
- ・茂丸株式会社
- ・びわ湖チャリティー100km歩行大会

物品協賛

企業名	商品名	個数
株式会社小谷穀粉	業務用お茶パック	5,400
赤城工業株式会社	瞬間冷却剤 キャリーアイス	100
東和製薬株式会社	東和製薬 熱冷却シート	1,000
モンスターエナジージャパン合同会社	モンスターエナジードリンク	465
クラシエ株式会社	スカイウォーター スポーツドリンクパウダー	2,240
希望食品株式会社	アルファ化米（白飯）	300
株式会社コパ・コーポレーション	スパイダーコーティング（防水スプレー）	72
オカモト株式会社	貼るカイロ 鬼熱 快温くん+ オカモト 高温カイロ	1,880
	オカモト 貼らないカイロ快温くん鬼熱	2,480
アイリスオーヤマ株式会社	貼るレギュラーカイロ	960
	貼れないレギュラー	1,440
	カイロ靴下用	960
アスザックフーズ株式会社	あめ色玉ねぎのスープ	150
株式会社 MonotaRO	モノタロウラミネートフィルム	5
	モノタロウ防災シート	1
株式会社 お茶の水 おりがみ会館	日本紙おりがみ、友禅おりがみ	700
積水化学工業株式会社	マスクライトテープ# 730	30
ニチバン株式会社	フィルムクロステープ養生用	30
株式会社寺岡製作所	P- カットテープα	6

助成

- ・公益財団法人車両競技公益資金記念財団
- ・公益財団法人日本財団
- ・一般社団法人日本戦没者遺骨収集推進協会
- ・社会福祉法人中央共同募金会

無線機無償貸与

- ・株式会社オンザウェイ
- ・西菱電機株式会社

サービス提供

- ・株式会社PR TIMES

メディア掲載一覧

No	活動名	掲載メディア	掲載日
1	オオバナミズキンバイ除去活動	朝日放送テレビ「ABC ニュース」 京都新聞	2024年10月19日 2024年10月20日
2	びわ湖の研究者になろうツアー	びわ湖放送	2025年3月30日
3	沖縄県石垣島海洋漂着ゴミ水際掃討大作戦	八重山日報 NHK	2025年2月15日 2025年2月16日
4	沖縄県戦没者遺骨収集活動	NHK 日経新聞	2025年2月19日 2025年3月29日
5	宮城県山元町東日本大震災復興支援活動	広報やまもと3月号 NHK 河北新報 河北新報 関西学院大学新聞	2025年3月 2025年3月10日 2025年3月12日 2025年3月22日 2025年5月17日
6	三重県熊野市活性化活動	中日新聞	2024年8月9日
7	山形県日本海沿岸清掃	荘内日報	2025年3月6日
8	新潟県関川村活性化活動	新潟日報	2025年3月22日
9	新潟県関川村大したもん蛇まつり活性化活動	村上新聞	2024年8月31日
10	新潟県佐渡市海岸清掃活動	NST 新潟総合テレビ 新潟日報	2024年9月17日 2024年9月21日
11	西伊豆町活性化活動	伊豆新聞	2024年11月25日
12	千葉県印旛沼クリーン大作戦	東京新聞	2024年8月8日
13	千葉県佐倉市活性化活動	「ちいき新聞」佐倉東・酒々井版	2025年4月18日
14	長崎県対馬市海岸清掃活動	対馬新聞 テレビ長崎 朝日新聞	2025年3月21日 2025年3月29日 2025年4月4日
15	長野県伊那谷環境保全活動	中日新聞 南信州新聞	2025年3月15日 2025年3月16日
16	飯田高校吹奏楽部による定期演奏会協力	朝日新聞 北國新聞 MRO 北陸放送	2024年6月9日 2024年6月11日 2024年6月11日
17	琵琶湖外来水生植物除去大作戦 2024	NHK 読売テレビ	2024年9月13日 2024年9月13日
18	令和6年度能登半島地震救援活動	中日新聞 NHK	2024年5月5日 2024年5月4日



①2024年10月20日付
「京都新聞」



③2025年2月15日付
「八重山日報」



④2025年3月29日付
「日経新聞」



⑤2025年3月12日付
「河北新報」



⑥2024年8月9日付
「中日新聞」



⑦2025年3月6日付
「荘内日報」



⑧2025年3月22日付
「新潟日報」



⑨2024年8月31日付
「村上新聞」

メディア掲載一覧



⑩2024年9月21日付
「新潟日報」



⑪2024年11月25日
「伊豆新聞」



⑫2024年8月8日付
「東京新聞」



⑬2025年4月18日付
「ちいき新聞」佐倉東・酒々井版」



⑭2025年3月21日付
「対馬新聞」



⑮2025年3月16日付
「南信州新聞」



⑯2024年6月11日付
「北國新聞」



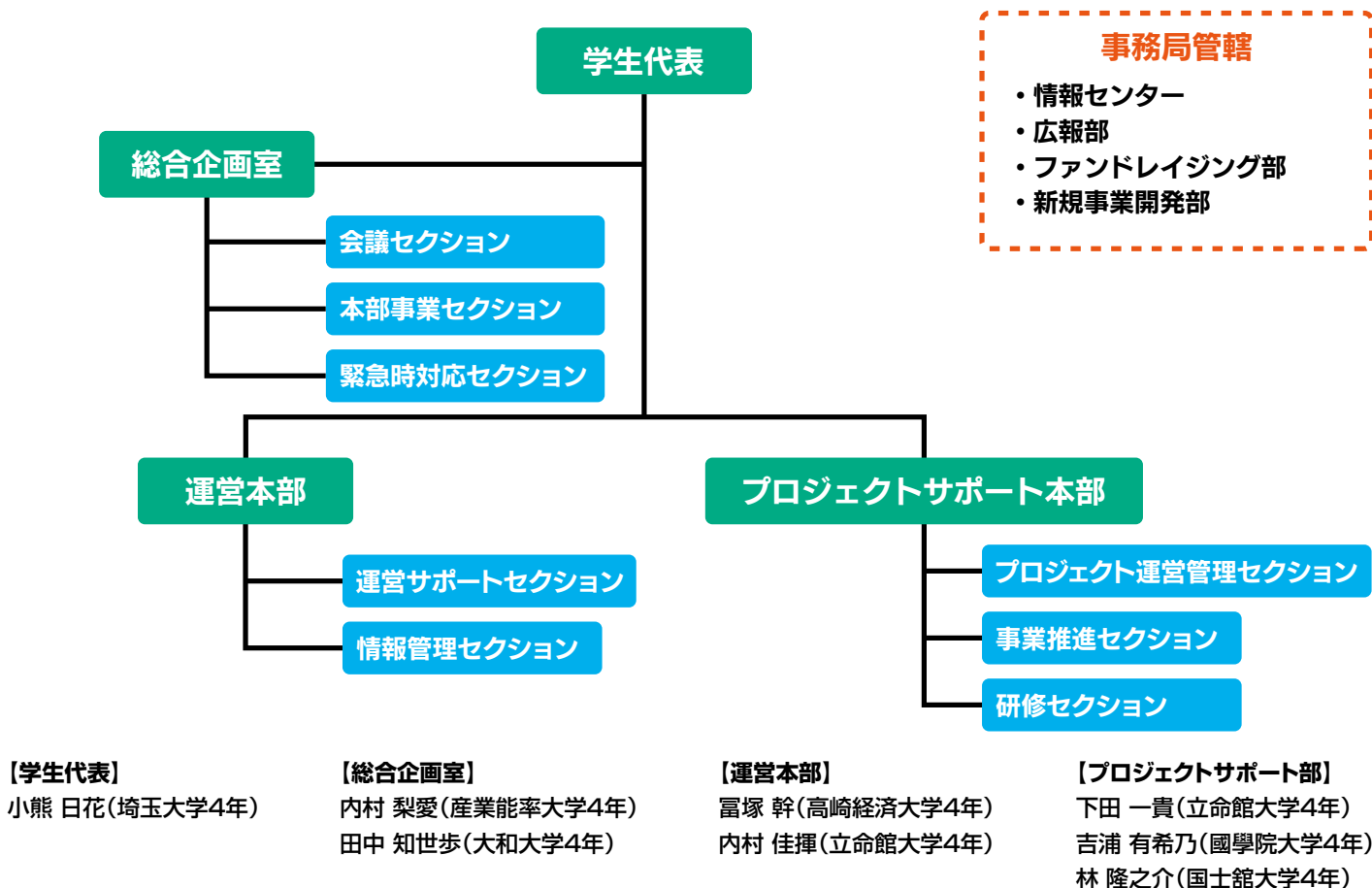
⑰2024年9月13日付
「NHK」



⑱2024年5月5日付
「中日新聞」

収支報告

収入の部		支出の部	
入会金・会費	35,729,242 円	事業費	142,925,244 円
寄付金	3,685,558 円	管理費	27,724,437 円
助成金	36,170,176 円		
事業収入	92,193,654 円		
その他	34,696 円		
合計	167,813,326 円	合計	170,649,681 円
当期収支			▲ 2,836,355 円



●クラブ一覧

東京世田谷クラブ
東京砧クラブ
東京駒沢クラブ
東京市ヶ谷クラブ
東京三崎町クラブ
東京白山クラブ
東京板橋クラブ

東京小日向クラブ
埼玉越谷クラブ
東京多摩クラブ
東京八王子クラブ
東京日野クラブ
神奈川白楽クラブ
群馬高崎クラブ

山形酒田クラブ
京都今出川クラブ
京都上賀茂クラブ
京都西院クラブ
京都京田辺クラブ
京都深草クラブ
大阪千里山クラブ

大阪吹田クラブ
大阪茨木クラブ
大阪東大阪クラブ
兵庫西宮クラブ
滋賀草津クラブ
滋賀瀬田クラブ
長崎佐世保クラブ



中国語 韓国語



クラスレッスン

2名～6名の少人数制ですので、
きめ細かい授業が行えます。



プライベートレッスン

一対一でじっくりと「わかる」「使える」
実践的なスキルを身につけます。



企業派遣

ご要望を調査し、目標に向けた
オリジナルカリキュラムを作成。



表参道から徒歩5分

学校や会社のあとにも通える
便利な立地です。



青山国際教育学院

TEL : 03-3403-1901

〒107-0062 東京都港区南青山3-8-40 青山センタービル3F





熱意は人を動かし、社会を動かす[®]

<https://www.ivusa.com/>

2025年 7月

発行・編集：特定非営利活動法人 国際ボランティア学生協会 (IVUSA)

〒156-0051 東京都世田谷区宮坂 1-34-4 ザ・アゼリアハウス B-102

Tel/Fax 03-6751-2683 E-mail ivusa-office@ivusa.com